

---

# とある魔術の禁書目録 S S   F A L L E N   A N G E L 【おちたもの】

しゅうとん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある魔術の禁書目録SS    F A L L E N    A N G E L 【おちたもの】

### 【Nコード】

N O 1 3 3 N

### 【作者名】

しゅうとん

### 【あらすじ】

学園都市で殺人事件が起きた。それは、とある人物がしたことだった。とある人物はすでに死んでいるはずの人物。微力の魔術に氣付いた土御門、上条、一方通行、ステイルは、事件に幕を落とすことはできるのか？科学と魔術が混合する時―物語は始まる。

## 序章【はじまりの夜】（前書き）

作者は、15巻までしか読んでいないので時間などがよく分らない状態になります。  
ご了承ください。

## 序章【はじまりの夜】

ここは、学園都市のほぼ中央に位置する第七学区。

数々の学校があり、学舎の園のような場所もある。日中なら人のにぎわいもあるだろうが今は深夜。

スキルアウトなどの不良と呼ばれる少年たちが活動する時間帯。

生徒たちは、寮に帰って就寝する時間帯。

路地裏では、争いをする音が聞こえる。

そこには、似合わない人物がいた。髪を緑に染めたオールバックの長身の男がいた。

「偶然。しかし、ここはどこだ。」

その男は、少年たちに武器を向けられ睨まれている。その少年達は、パイプやバットなどの武器のほか、銃などの武器も持っていた。

中には、学園都市製の試作品の武器まである。一撃で人を的確に撃ち抜くこともできる演算銃器スマートウェポンまである。

だがその中心にいる男からは余裕という言葉が感じられた。目をつぶり、武器を向けられているのにもかかわらず、少し笑っている。

少年は、唇を噛んで銃を銃を構える。

「なめやがってツ……。ぶっ殺してやる!!」

「私に弾丸はあたらない。」男は、一言つぶやいた。たった一言つぶやいただけだった。

少年は、銃の引き金を引いた。銃声が響く。その音は、無駄に大きく周囲に響き、銃口から出る煙はゆらゆらと揺れている。銃声が大きかったため、すぐに警備員アンチスキルもくるだろう。

そして、少年が撃ったと思われる先には、平然と立っている男と銃弾が転がっている。

「チッ。能力者かよ。オラオラオラアア。」少年は、叫び声をあげながら弾丸を何発か撃った。それに共鳴してほかの少年たちも弾丸を放つ。

やはりその男、錬金術師には届かなかった。少年たちの中の何人かは逃げ去って行く。

「どんな能力だ？弾が一発も当たらねえ。」

「当然。わが黄金練成（アルス・マグナ）に例外はなし。」

一人の少年が走っていく。そして鉄パイプで殴りかかった。

「少年よ。死ね。」たった一言つぶやいただけだった。殴りかかった少年は、魂が抜けていくように目を閉じ動かなくなる。

そこで残っていた少年たちは、自分の命の危険に気付く。だがもう遅かった。

「私からは逃げられない。」また錬金術は、言葉をつぶやく。たったそれだけだったのに少年たちは足が動かなくなった。

「やめろよ。やめてくれよ。なんで俺がこんなことになんきやいけないんだ！！」少年は、今までしてきたことを忘れ錬金術師に言葉を投げかける。

「なぜだ？いつもなら、無差別な殺しはしないのだが、私の心の中でしなければいけないような気がしてきた。残念だ少年。冥福を祈る。」

「ひつ。言つなよおおおお。」少年は叫ぶ。しかし、その祈りは神には通じなかった。錬金術師はあまりにも残酷な言葉を投げかける。

「少年よ。体の中心から爆発せよ。」

爆弾が爆発するような音とは違い。グチャという人間の生々しい音が響いた。

返り血を浴び、真っ白なスーツが赤く染まっていた。

「必然。私はなぜここに？記憶がない。なぜだ。」ゆらゆらとゆつくり錬金術師が歩いていく。頭にあるのは、一人の少女の顔だった。それだけを頼りにゆつくりと。

サイレンの音が響いた。錬金術師は耳を傾けようと思わなかった。

「そのもの、止まりなさい。」警備員アンチスキルが路地裏に入る。警備員は驚愕した。

路地にあつたのは、大量の血だまりともはや人とは思えないような  
体の一部、内臓。警備員は、嘔吐した。ホラー映画とは違う、本物  
死体。

そして、顔をあげた先にあつたのは、光があつた。その光はまるで  
微弱な力が分散するようにゆらゆらと消えていった。

## 一章？ 静寂【にちじょう】

同時刻。ここは、違う第七学区のとある学生寮である。

そこのある一室、そこに上条当麻はいた。

「だー。もう、ちくしょう、なんですか？宿題なんてしりませんのことよー！」

上条は、担任の先生に『かみじょーちゃんは、成績が悪いので宿題追加です。』と言われ今日この頃である。その宿題の量とは莫大なもので燃やしたくなってくるほどだった。上条は、燃やそうとしたが子萌先生に怒られるということよりも他の生徒ににらまれるといった素敵イベントを過ごしたくなかったのである。

三連休の最後の日も終わり二十四時を回ったところ。三連休の過ごし方としては、日ごろの疲れを取ろうと思っていたのだがそんなものかなうはずがなかった。

さすがの上条も三連休の運勢は、許せないものがあつた。不良のけんかに巻き込まれ、まずは走り、逃げ切った上条は先日買ったばかりの自転車と不良の自転車を間違えてしまい自転車で逃げ切り、最後は川に落とされるといった何とも一人トリアスロン状態だった。それが三日連続だ。上条の疲労はピークに達するのだが、それはすべて午前の出来事だ。午後に何があつたのか、それは想像に任せることにする。

「とうま……。おなか減ったよ……。」

その声に上条はビクツとなった。寝ていたはずの少女が起きていたのだ。

その銀髪碧眼空腹シスターのインデックスは、眠そうな顔で上条の眼を見ていた、ように見えた。上条は直感で悟った。自分の後ろにあるのはキッチン。そこにあるのは数々の食料がある冷蔵庫。

「まって！！てかお前、ちょっと前に夕飯食ったばっかだろう！！あー。それは、明日の朝ご飯ッ！！」上条は、必死で冷蔵庫の前に

立ちふさがるが、空腹＋暴食少女の前になぎ倒された。

さすがの上条の右手に宿る、どんな異能の力を触れれば打ち消す幻想殺しは、役には立たない。

上条が気を取り戻した時には、インデックスは、ぐっすりと寝ており、冷蔵庫は空っぽだった。

「不幸だ……。」

そして上条は、時刻を確認しようと時計を見る。そしてもう一度眼をこすり見る。

時計は、朝の四時半を指していた。まさに絶望的だったので上条は全力で現実逃避しようと思うのだが窓からは少し明かりが入っていた。

「ふっ。残り三時間ちよつと……。四教科分……。」

『今日未明、第七学区の路地裏で殺人事件が……。』上条はテレビのある方向をみる。

「スキルアウトが殺されたのか。ってこれってこの辺じゃん。インデックス大丈夫かあ？」

『発見した警備員は、ショックで意識がない様子で……。』

上条は、宿題のことを忘れていたのだがもう一つの重大なことは覚えていた。

「朝ごはん……。」

上条は、盛大にぶっ倒れた。



## 一章？ 本物【にせもの】

ここは、第七学区。とある学生寮とは少し離れたところだ。

そこに、一方通行は、いた。コンビニで買ったらしき缶コーヒーが入ったレジ袋をぶらぶらと揺らせながら。

彼は、学園都市の暗部組織『グループ』の一員である。

だが、今日の分のやることは終えたので休んでいるところである。

少し前に彼は、銃声を聞いているのだが無視をした。今サイレンが聞こえたので警備員<sup>アンチスキル</sup>だろう。

一方通行は、スキルアウトだろうとでも勝手に予測した。

「あア？うッせーな。この一方通行様が休憩してるのによオ。」

かつての一方通行なら能力で音を反射していただろう。しかし彼は、無駄に能力を使えなくなってしまった。

不意に足音がしたので前を見てみると高校生くらいの腕に入れ墨を入れた少年が走ってくる。

一方通行はその少年が自分を通り過ぎようとしてる所で足をかける。

少年は見事に転んだ。頭を打ったらしく押えている。

「ハッハアー。ド派手に転びやがッて、サイコオにおもしれエが、

無効で何があったかきかしてもらおうか？」

一方通行は、少年に聞くが少年は何もしゃべらない。沈黙が続く。

「・・・。なんか言えよ。くそ野郎オ！！」一方通行は罵倒し少年を蹴る。

「髪が緑の背が高い奴だ。弾が当たらないと言ったら本当にあたらず、死ねって言ったらひとが死んだ・・・。仲間が殺されたんだ。」

少年は半泣きで一方通行のほうを見る。

「ハッ。ンなわけねエだ口。そんな能力者いねエよ。」

自分が言った通りになるといふ能力者は書庫にもいないはずだった。そこまでの能力だったら余裕で超能力者（レベル5）扱いにされてもおかしくはない。

「ひつ。いたんだよお。はっ、はっ。」

「ちっ、なさけねエ野郎だな。」

言葉を吐き捨てて歩き出そうとした。コンビニのレジ袋がゆらゆら揺れる。

「待ってってミサカはミサカはあなたを呼びとめる。」

一方通行は懐かしい、とある少女の声がした方向をみる。そこには、青い空色のワンピース姿の打ち止め（ラストオーダー）がいた。

一方通行には違和感があつた。打ち止め（ラストオーダー）が居候している黄泉川の家から離れている。偶然とは思えない。

そしてもう一つ、おかしいことがあつた。

「とことんついてねエな。で、なんでおまえがここにいて、おれに拳銃を向けているんだ？」

そう、打ち止め（ラストオーダー）は、少女には似合わない拳銃を持っていた。

「わからないってミサカはミサカは小首を傾げてみる。でもわかることがあるのってミサカはミサカは言い切る。」

ポケットに入っていた拳銃を取り出す。一方通行は確信していた、これは打ち止め（ラストオーダー）ではないと。

「あなたを殺さなきゃいけないみたい。」

パン、と銃声が響く。

しかし、まだ能力を発動できる状態にしていな一方通行はいつも通り弾を受けたりしなかった。よけただけだ。

「ッたく。何の能力者だア？おまえ。」

「私のこと忘れちゃったのってミサカはミサカは涙目になってみたり。」

その声、口調、すべてが打ち止め（ラストオーダー）だったのだが一方通行には偽物だということが分かる。わかる事が不思議でならなかったのだが。

「下手な三流芝居はヤメロ。本気で撃ち殺すぞ。」

打ち止め（ラストオーダー）はさっきまで笑顔だったのだが、いき

なり童話に出てくるような魔女のようにひきつった笑顔になる。

「クックククツ。駄目だねー、能力者。もっとこうさ、愛情とかないのー。」

声は打ち止め（ラストオーダー）のものであったが、口調がいつものような口調ではなくなった。

「いやー、君はこの少女を大切にしてるようだったからねー。紳士的に殺せると思ったんだけどー、駄目だったみたいねー。」

「チツ。残業かよ、めんどくせエ。おまえの口調みたいに体を伸ばしてやる。」

紳士的にはいかないようだねー、と打ち止め（ラストオーダー）は言う。そのまま、何処の国の言葉かわからない言葉を言う。すると、「あんまり見ないほうがいいよー、グロテスクだからね。」

打ち止め（ラストオーダー）の体から血が噴き出した。血が急激に吹き出て皮と肉と骨だけが残る。すると皮と肉と骨が動き出し、大きき、形と姿を変えていく。そのまま、その体に流れ出たはずの血が戻っていく。

むくつと完成したらしき『物体』は立ち上がり。

「さあ、原始的な殺しあいと行こうじゃないー。」

『物体』は手を大きく広げ空気を操る。まさにそれは一方通行、そのものだつた。

「ほんとうに面倒なことになつてきたぜ。」

そこで二人の超能力者（レベル5）が激突する。

## 偽物【ほんもの】

「どうだい？自分と戦う気持ちは？」

完全に一方通行の姿、声が同じな『偽物』は、満面の笑みを浮かべて一方通行の顔を見る。

一方、本物の方は鋭い目つきで『偽物』をにらんでいた。

「人の顔使いやがッて。オレをなめてンじゃねエ！！」

一方通行はチャーカーを能力モードに切り替える。

「ふふ、無理無理。今の君じゃ僕には勝てないんじゃないか？僕は八月二十五日の君をモデルにしている。能力はずっと使えるってわけだ。」

一方通行は何も言わずに地面をける。それだけでコンクリートが強大な威力の砲弾へと変わってしまう。

それはものすごい速さで『偽物』のほうへ、一直線で飛んでいく。しかし『偽物』は動かない。

そのコンクリートの砲弾は『偽物』にぶつかる。

直後一方通行の足元で、砂煙が巻き上がり轟音が鳴り響く。

「ッ！！！！」

一方通行は予想もしていなかった。

同じ能力が使えるなんて、はったりだと思っていた。

「何その顔ー。何に驚いているわけー？」

笑いながら『偽物』は話す。

「ふざけンじゃねエぞ。この能力を使うには相当な演算能力が必要なはずだ。テメエに出来るわけがないだろう！」

一方通行の演算能力は並大抵のものではない。

それが出来るとしても能力が使えるということにはつながらない。

「ふふ、ここに入ってる脳みそはね、真正正銘、君と同じ構造になっている。完全な君のコピー体というわけだ。」

わかったかな、と『偽物』は続けて、

「もう一度言おう。今の僕は八月二十五日の君をモデルにしている。『本物』の君に勝ち目はないよ。」

「勝ち目がないねエ。確かにおれがあの時から何もしてなかったらな。」

うすら笑いを浮かべて、

「あの時とは違う強さを手に入れた。『偽物』のテメエに勝ち目はねエゼ。」

「っはははは、戯言を。くだらない妄想はやめときな。君は今から僕に殺される。」

そう『偽物』は告げ、地面を蹴る。

しかし、なにも攻撃を受けない状態の二人にはあまり関係ないだろう。

戦いではないのだ。

『偽物』にとつての『勝ち』は、時間稼ぎ。

時間がたてば、一方通行は能力使用不可の状態に陥り、『偽物』の『勝ち』が確定される。

「そんなンじゃ、話にならねエな。」

タンッと地面を蹴り、『偽物』の前で立ち止まる。

そして、一方通行は腕を振り上げる。

「君もよく知ってるだろう？ そんな攻撃できないことを。」

一方通行は無視してそのまま『偽物』の頬を殴る。

何も起こらないはずだった。

なぜなら、『偽物』の『反射』が適用されていたからだ。

しかし、『偽物』は飛んでいく。何メートルも転がる。

「なぜだ……。反射は適用されて……。」

そのとき『偽物』の耳に一方通行の笑い声が聞こえた。

「ひやはははは。なんだア？ その幽霊でも見たような表情はア？」

頬をおさえながら『偽物』は、言う

「なにをした！僕はまだ君のままだぞ！」

「あれエ、知らないのオ？『反射』に攻撃をあてる方法。」

一方通行の反射は何度か無効化されたことがある。

少年の不思議な力。

垣根帝督の未元物質。

そして、

木原数多の格闘術。

『反射』が適用される直前に手を引きもどすことで戻るベクトルを反転させるという理論で一方通行を圧倒した人物だ。

「テメエが反射する直前でベクトルを変えたただけだ。なんなら、もう一度やッてやろうかア？」

もう一度、一方通行は踏み込み、殴る。

同じように『偽物』は飛んでいく。

「オイオイ、こんなにあつさり、死んじまうのかア？」

一方通行は、近くにあるコンクリートの塊を持ち上げる。

「これで殴ればどうなるだろうな？」

そのまま、殴るモーションに入る。

倒れている『偽物』にコンクリートの塊を振り落とす形で。

ゴンツという音がした。勿論コンクリート塊の音だ。

しかし、それに続いて人が倒れる音がする。

それは一方通行が倒れた音だった。

「・・・。ギリギリだねー。危なかったよー、死ぬところだった。」

一方通行は答えられない。

そして考えることもできなくなった。

「そっかー。しゃべれないんだっけー？なら種明かしをしてやろう。その君の杖には厄介な機能を取り付けられていたね。『ミサカネットワーク』の通信以外の電波をジャミング』するんだろっ？なら、どうすればいい？」

一方通行はその先が分からない。

普段なら真っ先に気づいてるはずなのに、

「そうさー。本体をたたけばいいんだよー！打ち止めに僕の仲間が丹念に作ったウイルスを入力したのさー！ー！」

一方通行は何も言えない。動けない。

「どうした？僕に勝つんじゃないのかなー？さつさと立ちやがれ。」

芋虫のように這いつくばる一方通行を動けないとわかっていながら『偽物』は能力を使わずに蹴る。

「ひゃひゃひゃひゃー。たまんねえなー！ー！いつそ、このまま殺して……。」

『やめろ、きつかけを作るだけだ、殺すな。』

不意にあたり男の音が響く。

それは周りの建物と反響し繰り返し聞こえた。

「……。わかったよ。はあ、つまんねー。」

『だが、数時間は動けないようにしとけ。さつさと戻ってこいよ、今日のノルマは終わった。』

男の声は電話を切ったときのようにいきなりとだえる。

「……とまあ、そんなところだから、足をやらせてもらうわ。」

『偽物』は力強く蹴る。

一方通行は激痛を味わうが、声が出せなかった。

にんまりと笑う『偽物』。

「やっぱ、もうちょっとやらせてー。ひゃはあはははっははー。」

一方通行は蹴られ続けた、『偽物』が能力を使わなかったため骨折程度で済んでいると思う。

「じゃ、十分後位にミサカネットワークの通信が戻れると思うよ。」

そう言い歩き始めた。完全に一方通行をコピーしている様でふらふらと歩いている。

「デメエ、なにモんだ……。」「

一方通行は痛みに顔をしかめながら聞く。

『偽物』は、もう通信戻ったか、という顔で振り返る。

「僕は、とある組織に所属する者だ。名はない、今は一方通行。僕は君の隣にいる人かもしれない。君が全く知らない人かもしれない。僕は君かも知れない。君は僕かも知れない。」

それと、と『偽物』は続けて

「打ち止めは僕らの組織で預かっていると思う。助けたいんだったら、早く動けるようになることだな。ふふ、はは。」

そのまま、その白い少年は笑いながら歩いて行った。

一方通行はその一点の白が暗闇に吸い込まれるのをただ見てることしかできなかった。

「畜生がアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

！

少年の咆哮が闇の中で響き続けた。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0133n/>

---

とある魔術の禁書目録SS F A L L E N A N G E L 【おちたもの】

2010年10月10日16時54分発行